

王清穆『農隱廬日記』に見る 民国前期の江南士紳

小野寺 史 郎

はじめに	145
I 王清穆をめぐる人的ネットワーク	147
II 王清穆の読書生活	153
おわりに	159

はじめに

王清穆（字は丹揆。1860–1941）は清末から民国期にかけて活動した江蘇省崇明県の士紳である。1890年に進士及第、戸部雲南清吏司正主稿、総理各国事務衙門会典館協修、外務部推算司主稿などを経て1903年に新設の商部に移り、右参議から左参議、右丞に昇進。この間、南洋公学代理監督、江蘇省鉄路公司総理などを務める。1906年に直隸按察使に任ぜられて商部を離れ、次いで母の喪により帰郷。崇明に朝陽輪船公司を開設、予備立憲公会会員、蘇属諮議局籌辦所協理、度支部清理財政処浙江清理財政正監理官などを務める。辛亥革命後、統一党参事、江蘇都督府財政司長。1915年、父の喪により帰郷、崇明堡西に「農隱廬」を建て隠遁。1919年に江浙水利連合会会長、太湖水利工程局督辦に就任。1929年には国民政府より導准委員会委員に任ぜられる。1938年に崇明島が日本軍に占領されると、上海フランス租界に難を避け、同地で没した⁽¹⁾。

『農隱廬日記』はこの王清穆の日記で、若干の欠落があるものの、概ね1916年から1940年にかけての66冊分が上海図書館に収蔵されている⁽²⁾。形態としては50葉の線装のノートに毛筆で毎日欠かさず書かれており、またほぼ正確に、一冊に4カ月分の内容が収められている(図1)。特徴的な点として、庚午(1930年)までは陰暦を用いているが、辛未(1931年)以降は王清穆自身が考案した独自の暦法を用いていることが挙げられる(後述)。内

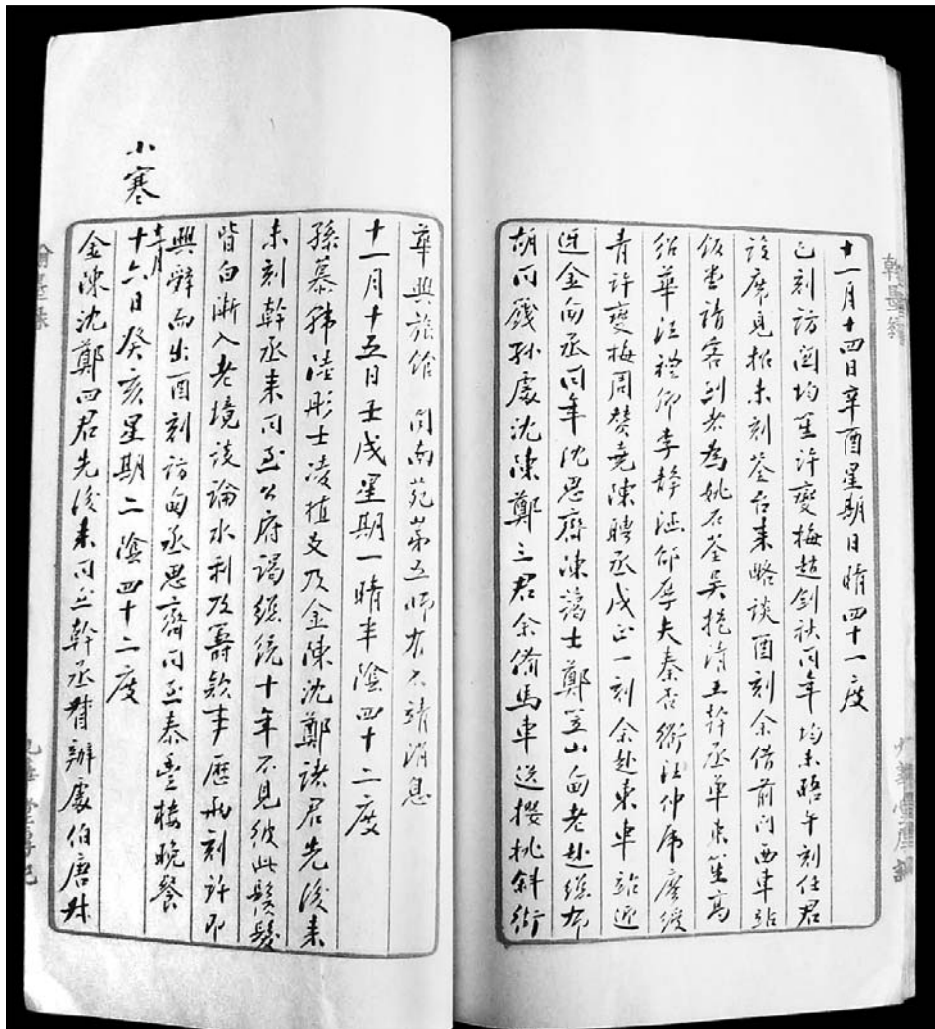


図1 王清穆『農隱廬日記』

容としては、たとえば内的な修養・自己省察に類する記述などはあまり見られず、専ら自らの行動の記録あるいは備忘録といった趣が強い。

筆者はさきにこの『農隱廬日記』を利用して、1916年から1921年にかけての王清穆の政治・経済活動について検討したことがある。そこでは同史料に見える内容のうち、朝陽輪船公司經理・昌大公典經理・大生分廠股東としての経済活動、外沙分県問題への対応、『崇明県志』の編纂、塩政への提言、減賦の請願、江浙水利連合会会長・太湖水利工程局督辦としての水利事業の推進、蘇社理事としての江蘇省地方自治への参与、といった点を中心に紹介した⁽³⁾。

本稿では、前稿で論じた王の政治・経済活動以外に、同時期の『農隱廬日記』から読み取れる情報について検討したい。具体的には、王清穆の人的ネットワークの構成や知的傾向などを中心に検討し、民国前期の江南士紳の在り方の一端を明らかにしたい。

I 王清穆をめぐる人的ネットワーク

1916年から1921年の『農隱廬日記』に現れる王清穆の知人は、おおまかにいくつかのグループに分類することができる。

1 崇明県内の人間関係

一つ目は、崇明県内の士紳である。特に王清穆が父の喪に服している1916年から1918年の『農隱廬日記』の内容は、基本的に農業と、公典（共同出資による慈善的金融機関）の設立や県志編纂、地域や親族の婚礼・葬儀といった出来事に関する記載（および後述する読書記録や新聞記事の抜書）に終始しており、そこから彼と県内の士紳たちとの関係を探ることができる。

この時期の王の人間関係としてまず目につくのは、各地の、特に農業専門学校で学ぶ県出身者に対する援助についての記述である。1917年に北京農業専門学校を卒業した龔垂虞（丁巳五月廿四日。以下、日付は『農隱廬日記』のもの）、やはり北京農業専門学校を経て、農商部から南通棉業試験場に派遣された瞿賓九（丙辰六月廿七日）、南通農業専門学校の郁幼生（丙辰七月廿三日）、その兄で王清穆の佃戸の管理をしていた郁継生（丙辰十月十三日、丁巳九月廿五日など）などである。王清穆は彼らに紹介状を書いたり、逆に彼らを通じて北京・南通・蘇州の農業専門学校や農業試験場から出版物や蚕紙（蚕の卵を紙に産みつけさせたもの）、野菜の種を入手したりしている。

同じく南通農業専門学校に通う張廷柎（南榮）については、王は定期的に学資（年30元）を援助していた（丙辰七月廿五日、丁巳七月初一日）。1918年に張が同校を好成績で卒業すると（戊午六月初六日）、王は彼に「農事改良計画書」の作成を依頼（戊午八月初三日）、自らが設立した求己小学校付設の農作試験場で養蚕や棉花栽培に従事させている。母方の親族でやはり南通農業専門学校を卒業した張祖馨についても、あらためて商業を学びたいという本人の希望に反対し、同試験場で働くことを提案している（辛酉六月十二日）。

しかしこの後、郁継生は南京で高等警官学校を受験（丁巳四月初十日）、龔垂虞と瞿賓九は北京で文官考試を受験している（己未八月二十日）。また郁幼生は1921年に上海で投機に失敗して失踪している（辛酉八月初二日）。そのため、若い世代を農業技術者に育て

て農村改良に従事させるという彼の構想は必ずしもうまくいかなかったようである。

この他、県出身の日本留学生もおり、慶應義塾に通う陳尚高から農業に関する日本の書籍や樹木の苗を入手したり（戊午三月初八日、己未三月十六日）、1918年に日本に留学したものの、直後に日中共同防敵軍事協定反対運動に同調して帰国した胡子鋒が、やはり日本に戻りたいというのを手紙で止めたり、といった記述も見える（戊午三月初五日、四月十四日、八月十三日）。

崇明県には、内沙（崇明島）の不在地主が、島外の外沙（後の啓東県）に佃戸をもつという経済構造が存在した⁽⁴⁾。そのため王清穆の日記にも毎年秋になると外沙の田租徴収に関する記述が見える。その際の「司帳」としては、孫友琳（丙辰十月廿七日など）や施丹臣（戊午五月十九日）、施家鼎（調元、己未六月二十三日）、施洗凡、実際に外沙に出向いて田租を回収する役として巖竹林・巖子喬父子（丙辰九月三十日）、約子娛（丙辰十月廿二日など）、徐陶甫（丁巳七月十六日）といった名前が見える。孫友琳は陳志孚が自分の「収租」を任せていると紹介してきたもの（丙辰七月十四日）、施丹臣と施洗凡はいずれも施瑞清が推挙したもので、施洗凡はもともと施瑞清の家の家教だったとある（戊午五月十九日、己未閏七月初六日）。施家鼎は尊道社の施同仁⁽⁵⁾の子で、王清穆が施同仁を先妻の蘇氏の家の家教に招いた後、その門人を引き継いで私塾を経営していた（丁巳七月廿九日、十二月廿六日、戊午正月初六日、二月初二日）。

王清穆はこれ以外にも、次男王毓僑（飴児）と長孫王炳章（増慶）の家教として施桂冬⁽⁶⁾から紹介された范培陔（丁巳八月初十日）や陸子青から紹介された朱如璋（萃拔）を雇っており、求己小学校創設後はその教師として引き続き朱や朱から紹介された袁松如や周象峩といった塾師を雇っている（戊午六月廿八日、七月初六日、十二月二十五日、辛酉正月十七日）。1919年に、暴利をむさぼる浙江商人の塩棧（倉庫）を打ち壊すという謠言が広まった際には、王は朱如璋と張廷柎を郷民の説得に派遣している（己未五月二十日）。

王清穆が県の士紳の活動に加わった一例として、1917年に始まる県志編纂事業がある。王清穆はその「主修」となったが、実際に作業の中心になったのは「総纂」の曹炳麟⁽⁷⁾である（丁巳二月十七日など）。ただ、曹は挙人の資格を持つ、当時の崇明における重要な士紳のはずなのだが、この件以外では王の日記にあまり名前が出てこない。王との個人的なつながりという点ではむしろその下で「分纂」を務めた陸燦昕⁽⁸⁾の方が深いようで、県志編纂以外にも、外沙分県問題（丙辰九月廿九日）、昌大公典の設立（丁巳三月廿三日）、塩政問題（戊午八月三十日など）、地方公会の組織（己未三月初九日など。王清穆が会長に就任）といった県レベルの問題に関して、書簡を送ったり、職場の第一小学校を直接たずねて相談したり、といった記述が散見される。なお、昌大公典は王清穆が経理となり、

堂弟の王清鼎（寿民）・王冠生（諱不明）の他、銭楽村・黄伯鈞らが董事に選ばれ、孫昌烜⁽⁹⁾らが査帳員となったが（丁巳六月初五日）、彼らはいずれも日頃から王と私的な往来があったことが確認できる人物である。孫昌烜は父の孫培元⁽¹⁰⁾が進士であり、自身も挙人で京官の経験があった。やはり県志の「分纂」の嚴師孟⁽¹¹⁾、「徴訪」の張模⁽¹²⁾、「絵図」の蘇人權⁽¹³⁾らも、県公署との交渉などに際して王や上記の士紳たちと行動を共にしている（己未五月二十四日）。王より上の世代のためこの県志編纂には関わっていないものの、施啓華⁽¹⁴⁾・施立先（諱不明）・施景華⁽¹⁵⁾・施棟⁽¹⁶⁾の兄弟、尊道社の龔少莘（1851-1920、庚申八月十六日、十一月十六日）なども、王と日常的な交友関係にあり、さまざまな事業に共同で参与したことが確認できる。他に、学問上の師に当たる老儒者の張応穀⁽¹⁷⁾を時折見舞いつつ、不撰生に苦言を呈したり、といった記述も見える（丙辰十月初六日）。

崇明出身の在京者としては、陸夢熊⁽¹⁸⁾・張康培⁽¹⁹⁾・銭応清⁽²⁰⁾・徐継高⁽²¹⁾らがおり、彼らに宛てた紹介状を書いたり（丙辰七月十五日）、塩務署への請願の取り次ぎを依頼したり（己未二月十六日、三月十九日、六月十七、二十日など）といった記述が見える。後述するように、1919年末に王が上京した際には、彼ら在京の崇明県人や、太嘉宝崇（太倉州・嘉定県・宝山県・崇明県）会館が歓迎会を開いている（己未十月三十日、十一月十一、二十三日）。王清穆の長男の王毓斌（?-1921）も北京で中国銀行総司券処辦事員の職に就いている（丙辰七月廿四日）。この他、崇明出身の外交官で、パリ講和会議に派遣された朱誦韓⁽²²⁾からウィルソンの演説の訳文を入手したり、帰国後に直接会議の様子を尋ねたり、といった記述も見える（戊午十月十一日、己未十二月初七日）。

『農隱廬日記』の特徴として、宗族として祭祀を行ったり、一族の子弟の援助をしたりといった活動に関する記述があまり見られないということが挙げられる。崇明県城に住む年の近い堂兄・堂弟の王清泰（彙初、1856-1919）・王清鼎や、年の離れた堂弟の冠生、堂姪の搏九などとは頻繁に往来があるものの、それ以外は堂弟の松甫（?-1925）・達衢（いずれも諱不明）の子を、商部の同僚だった張新吾⁽²³⁾の北京丹華火柴会社に紹介した（庚申正月十一日）という記述が確認できる程度である。

王氏代々の墓は県城近くの寿安寺にあり、清明節には王清穆も墓参りに訪れているが、基本的には幼い次男の王毓僑を同伴する程度であり、例外的に親族が集まった際も、前述の王清泰・王清鼎の他に仲侯（?-1923、清泰・清鼎兄弟の次兄である王清豫か）の名が挙がっているだけである（己未三月初七日）⁽²⁴⁾。理由は不明ながら、そもそも王清穆の父母である王誠（葆卿、1836-1915）・張氏（1834-1907）の墓は、寿安寺ではなく県城から離れた堡西に設けられ、農隱廬はその傍らに建てられている。

『王氏支譜』などによれば、王氏一族は、乾隆年間に蘇松鎮右營都司に任ぜられた王維

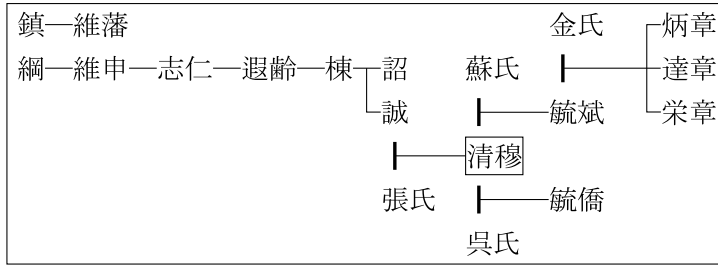


図2 王氏家譜

出典：王棟、王燮『王氏支譜』1864年、王清穆『農隱廬日記』。

藩（都閩）に従って江寧から崇明に移住してきたとされる⁽²⁵⁾。王清穆の高祖父にあたる王志仁（漢明、1734-1777）が早逝し家が困窮したため、長子の王遐齡（松年、1762-1821）は3人の弟とともに商業に従事し、財をなした。その死後、子孫で土地・家屋・財産を分割し、王遐齡の子で王清穆の祖父である王棟（冠勲、1793-1868）もその一部を相続したが、凶作と婚礼・葬儀などが重なり、加えて長子の王詔（雲蒸）が浪費家であったため家産を失った。末弟の王誠はそれに批判的で、自らは節儉に努めたという⁽²⁶⁾。このような経緯があったためかもしれない。

姻族も、母の張氏や、長子の王毓斌の妻である南翔金氏の親族に関する記述が時折見えるものの、いずれも王清穆の活動に直接関わっている様子はない。この点では王清穆の二番目の妻である呉県の呉氏が例外的である。「内兄」（妻の兄）であると同時に「同年」（科挙同年合格）でもある呉蔭培⁽²⁷⁾は呉県の有力な士紳であり、他に「内姪」（妻の甥）の呉社臣（社丞）の名も日記に頻出する。王清穆は蘇州では必ず「呉氏外舅」の家を基点に行動しており、1919年に呉氏が亡くなり、1921年に「呉氏外舅」が亡くなった後もこれは変わらない。むしろ太湖水利工程局が蘇州に設置され、1920年以降王清穆が蘇州に居住するようになって以降、その関係はより密接になっているように見える（図2）。

2 清末・官僚時代の人脈

二つ目は、清末の官僚時代からの知人である。北京の会試で知り合って以来の親友である太倉の唐文治⁽²⁸⁾、商部の顧問だった南通の張謇⁽²⁹⁾や無錫の周廷弼⁽³⁰⁾などがその代表である。彼らはいずれもこの時期の江南における有力な士紳であり、王清穆の活動にもさまざまな形で影響を及ぼしている。それ以外にも、王は1904年に商部官僚として上海・江浙の商務を視察し、上海商務總會の創設にも関与しているため、上海の商業界のほとんどの人士と面識があったと考えられる。例えば王は1918年の新年に上海で呉兆曾⁽³¹⁾・王

震⁽³²⁾・黄裳(秀齋)らを私的に招いて会食をしており(戊午正月十四日)、1919年末に王らが紡績工場の設立を計画した際には、大生紗廠駐滬事務所の呉兆曾や大生機器公司の郁寿豊⁽³³⁾に紡績機の購入について判断を仰いでいる(己未十月二十日、庚申三月初九日)。

前述のように、王清穆は1919年末から翌年にかけて、商部を辞して以来十数年ぶりに北京を訪れ、太湖の水利経費の支出と江浙の減賦を求める請願を行っているが、この際に多くの元同僚や友人と再会し、旧交を温めている。例えばこの時に面会した大總統の徐世昌⁽³⁴⁾は、王の商部時代の上司であり(己未十一月十五日)、他にも商部の元同僚として単鎮⁽³⁵⁾(己未十月二十八日など)・楊寿栢⁽³⁶⁾(同二十九日など)・邵福瀛⁽³⁷⁾・毛祖模⁽³⁸⁾(己未十一月初一日など)・熙彦⁽³⁹⁾(同初二日など)・紹英⁽⁴⁰⁾(同初六日など)・傅柏銳⁽⁴¹⁾(同十六日)といった名前が挙がっている。面白いところでは、総理衙門・商部時代の上司だった慶親王載振⁽⁴²⁾とも再会し、世の移り変わりを慨嘆している(同二十六日)。この他、旧友として陳世璋⁽⁴³⁾・周伝経⁽⁴⁴⁾(己未十月三十日など)・呉詒孫(己未十一月初一日)・廉泉⁽⁴⁵⁾・夏孫桐⁽⁴⁶⁾(同初四日)・汪鳳瀛⁽⁴⁷⁾・姚錫光⁽⁴⁸⁾(同初六日)・王景沂⁽⁴⁹⁾(同初七日)といった名前が見える。彼らはいずれも江蘇出身者であり、王が北京時代に同郷関係を基礎に人脈を構築していたことをうかがわせる。

3 江南士紳のネットワーク

三つ目は、特に1919年以降に王がさまざまな事業に関与していく中で新しく知り合った、あるいはそれ以前から知ってはいたものの、この時期以降より密接な関係をもつようになったと考えられる、江南地域の士紳たちである。基本的には上海・江蘇省がその範囲となるが、減賦や治水の問題に関しては「蘇浙七属」(江蘇省蘇州・松江・常州・鎮江、浙江省杭州・嘉興・湖州の旧7府)の利益の代表者として、浙江省の士紳とも協力関係を築いていることが確認できる。

王が治水問題に関わるようになったのは、1919年1月に江蘇水利協会の鄭立三⁽⁵⁰⁾が農隱廬を訪問し、江浙水利連合会(江蘇水利協会と浙西水利議事会の連合体)の発起人に加わることを依頼してきたことによる(戊午十二月十一日)。後に江浙水利連合会や太湖水利工程局で王と関わることになる金天翻⁽⁵¹⁾・龐樹典⁽⁵²⁾・袁承曾⁽⁵³⁾・宗嘉祿⁽⁵⁴⁾らの名前が初めて日記に見えるのは、この時に贈られた『江蘇水利協会雑誌』に彼ら書いた記事を読んだ、というものである(戊午十二月二十七、二十九日、己未正月初八日)。1919年3月に王が江浙水利連合会の会長に推挙され、同会会員で崇明県人の宋承家⁽⁵⁵⁾の説得でそれを引き受けると、上海に副会長(江蘇側代表)の潘澄鑑⁽⁵⁶⁾や同会会員の黄以霖⁽⁵⁷⁾を訪ねている(己未二月二十一、二十二日)。また、もう一人の副会長(浙江側代表)の沈

維賢⁽⁵⁸⁾ともこの後書簡の往来を始めている。6月には金天翻を蘇州の居宅に訪ね、同じく会員の費樹蔚⁽⁵⁹⁾・沈佺⁽⁶⁰⁾・錢崇固⁽⁶¹⁾らとも面識を得ている（己未五月初八、初九日）。

嘉興の金蓉鏡⁽⁶²⁾の名が『農隱廬日記』に初めて見えるのは、1919年5月に金が書いた浙江の減賦請願書を唐文治が手紙で転送してきた、というもので（己未四月十四日）、実際に会ったという記述が見えるのは、その4カ月後に上海で開かれた江浙水利連合会の際である（己未八月初七日）。この間、金蓉鏡は北京に赴き、前國務総理・内務部総長錢能訓⁽⁶³⁾や外交委員会委員長汪大燮⁽⁶⁴⁾ら浙江出身の京官とともに請願活動を行っていた（己未閏七月初八日）。錢能訓は同年11月に太湖水利工程局が設置されると、その初代督辦に就任している。王清穆は当初同局の会辦の職に就いたが、後に錢の辞職に伴い後任の督辦となる。

江蘇・浙江合同で減賦を請願することが決まると、金天翻が「蘇浙合請減賦呈稿」を起草、王清穆が校正を行っている（己未閏七月廿二日）。数日後、鄭立三からの手紙に、この公函について江蘇・浙江それぞれ3人ずつの名義とすることを陶葆廉⁽⁶⁵⁾が提案しているとあったのを受け、王は金天翻と相談の上、内兄の呉蔭培と儲南強⁽⁶⁶⁾・曾樸⁽⁶⁷⁾を江蘇側の代表とすることを決めている（己未閏七月廿六日）。王は数日後に上海の陶葆廉の居宅を訪ねており、「私は久しく拙存を敬慕していたが、今回はじめて会うことができた」と日記に記している（己未八月初五日）。それ以前から名前は知っていたが、この機会に面識を得た、ということのようである。陶葆廉は後に太湖水利局会辦として王を補佐することになる。

10月に上海で蘇浙士紳の合同会議が開かれ、この減賦と太湖水利の件について合わせて請願を行うことが決まり、前述のように王が金蓉鏡・沈維賢・陳其采⁽⁶⁸⁾・鄭立三らとともに北京に赴くことになる。この際に王は、前述の汪大燮（己未十月二十八日など）・錢能訓（己未十一月初二日など）の他、參議院議員の沈国鈞⁽⁶⁹⁾・沈金鑑⁽⁷⁰⁾（己未十月二十八日など）、前総統府秘書長の張一麐⁽⁷¹⁾（同二十九日など）、平政院書記官の汪曾武⁽⁷²⁾（己未十一月初一日など）、前財政部次長の趙椿年⁽⁷³⁾（同初二日など）、審計院院長の莊蘊寬⁽⁷⁴⁾（同初五日など）ほか多数の蘇浙出身の在京者・官僚と頻繁に往来して情報を交換している。また、參議院議員の呉宗濂⁽⁷⁵⁾についても、彼が崇明の塩務を議案として提出したことを在京崇明人の金任君の手紙で知り（己未六月二十七日）、書簡の往来を経てこの上京時に対面している（己未十月三十日）。これ以後も王清穆が彼らと書簡をやりとりしたり、また帰郷時に訪問したりすることを通じて北京の情報を得ていたことが日記の記述から確認できる。

この他、過去に面識はあったもののしばらく疎遠だったのが、以上のような活動の中で

再び連絡を取り合うようになったという例も確認できる。例えば趙鳳昌⁽⁷⁶⁾は、王が1919年末に上海の居宅を訪ねた時点で「六、七年会っていなかった」とある（己未十月二十二日）が、これ以降、王は上海を訪れる際に折に触れて趙を訪ねている。また仇繼恒⁽⁷⁷⁾についても、北京からの帰途、1920年1月に南京を訪れた際に職場の馬路工程局をたずねているが、手紙の往来はあったものの、やはり「十数年会っていなかった」という（己未十二月初十日）。王と仇はこの後ともに「蘇社」の理事に名を連ねることとなる。

蘇社は「蘇人治蘇」の実現を目的とする江蘇士紳の団体で、張謇の主導の下、1920年4月1日に南通で発起会が開かれた。王は4月末に上海の江蘇省教育会に旧知の沈恩孚⁽⁷⁸⁾（蘇社発起人の一人）を訪ねた際に参加を求められたようである（庚申三月十一日）。この前後には、やはり蘇社の発起人である馬士傑⁽⁷⁹⁾や方還⁽⁸⁰⁾からも訪問を受けている（同初三、十九日）。5月12日に南通に140人の士紳が集まり、蘇社成立大会が開かれ、王もこれに出席した（同二十四日）。理事に選ばれたのは得票順に張謇・黄炎培⁽⁸¹⁾・王清穆・沈恩孚・黄以霖・韓国鈞⁽⁸²⁾・張孝若⁽⁸³⁾・唐文治・馬士傑・張一麐・孫倣⁽⁸⁴⁾・仇繼恒・方還・穆恕再⁽⁸⁵⁾・錢崇固・吳兆曾・榮徳生⁽⁸⁶⁾・劉垣⁽⁸⁷⁾・張謇⁽⁸⁸⁾だが、ここには王の元々の知人（張謇や大生企業集団関係者、唐文治・沈恩孚・榮徳生など）、減賦問題や水利事業を通じて知り合った人物（黄以霖・張一麐・錢崇固）以外に、馬士傑や方還、韓国鈞のようにこれまであまり面識がなかったと思われる人物も含まれている。

王は同年6月末に再び上京、浙江省長となることが決まった沈金鑑や安徽省安慶道道尹の徐鼎康⁽⁸⁹⁾（庚申五月十六日）、審計院副院長となることが決まった趙椿年や大理院院長に再任した董康⁽⁹⁰⁾（庚申六月二十四日）、その他前述の蘇浙出身京官たちと太湖水利経費の捻出と江蘇省長・財政庁長の人事に関して情報を交換し、請願を行っている。この後、蘇社は徐鼎康や張一麐を江蘇省長とするよう政府に対する働きかけを続け（庚申六月廿七日、八月初七日）、最終的に1922年6月に韓国鈞が省長に再任している。

これらの事例から、減賦の請願や水利事業、省公署の人事といった省レベルの事業に際して、元々一定の声望と資源を持つ各県の士紳同士が、共通の知人や過去の関係を介して人的ネットワークを拡大し、活動を展開した様子がうかがえる。そしてそのネットワークが、別の新たな事業に際しても資源として活用されていったようである。

II 王清穆の読書生活

王清穆には、読んで興味をもった新聞や書籍の内容を日記に書き写す習慣があった。多くの場合非常に簡単な按語しか付されていないのだが、ここから王の読書傾向を探ること

ができる。

王清穆は1937年の文章で、それまでに蔵書2000巻、900冊余りを「農隱廬叢書」として整理したが、その際に「書物は大きく二つに分類した。一つは性理道徳を重視し、心身を陶冶するに足るもの。一つは政治経済を重視し、治国平天下の参考とするに足るものである。体が有って用が有り、内聖外王の学はほぼここに備わる。他に年譜・遊記も加え、見聞を広めるものとした。しかし詩文集は概ね含めず、制限を示した」と述べている⁽⁹¹⁾。1916年から1921年の『農隱廬日記』には140種余りの書名が確認できるが、これらもやはりおおまかにこれに沿ったカテゴリーに分類することができる。

1 古典・国学関連

まず「性理道徳を重視し、心身を陶冶するに足るもの」、つまり王清穆の士紳としての教養の根幹をなす古典や国学に関する著作である。

1916年から1918年の時期は、王がほぼ隠遁して晴耕雨読の生活を送っているため、日記の内容も崇明・上海・蘇州の知人との交際に関する記述、農業の合間に「気晴らし」として読んだ書籍の抜き書きが大半を占めている。具体的には、1916年の冬には王士禛『香祖筆記』（1705年）（丙辰十一月初六日-）、1917年の冬には王守仁『王文成公外集』（丁巳十一月十八日-）、1918年に入って左宗棠『左文襄公詩文別集』（1911年）（戊午正月廿七日-）、諸可宝『玉山朱氏遺書』（玉山書院、1900年）（戊午三月初六日-）、黄宗羲『宋元学案』（1838年）（戊午六月初七日-）、王応麟『困学紀聞』（戊午七月廿七日-）、黄宗羲『梨洲遺著彙刊』（時中書局、1910年）（戊午九月廿三日-）、黄震『慈溪黄氏日鈔分類』（1266年）（戊午十月廿四日-）、李元度『国朝先正事略』（1866年）（戊午十一月二十三日-）などである。1919年以降になると王が多忙になるためそれまでのような詳細な読書記録は減少するが、それでも1920年の正月休みに邵伯温『河南邵氏聞見録』・邵博『邵氏聞見後録』（己未十二月二十七日-）から抜き書きをしている例が見える。宋以来の諸儒の学説や逸話などを集めた書籍が多く、王の読書傾向がうかがえる。

この種の書籍に関しては、知的な背景を共有する知人から著書を寄贈されることも多く、唐文治から『大学新読本』、『中庸新読本』、『孝経新読本』などを（己未二月二十三日、己未十月初一日、辛酉五月二十五日）、汪詒年⁽⁹²⁾から汪康年『汪穰卿遺著』（1920年）を（辛酉正月二十九日）、金蓉鏡から『潜廬詩文雜著』を、いずれも公刊の際に贈られている（辛酉五月初一日）。

また姫仏陀『學術叢編』（上海倉聖明智大学、1916年）（丁巳二月廿五日）、孫毓修等『涵芬楼秘笈』（商務印書館、1916-1921年）（丁巳九月初四、初六日、戊午十二月二十日、己

未十二月十四日)、孟森『心史叢刊』(商務印書館、1916-1917年)(丁巳九月十二日)、徐珂『清稗類鈔』(商務印書館、1917年)(丁巳十一月廿八日)、夏敬觀『宋人小説』(商務印書館、1919年)(己未十二月十四日)といった叢書(やはり先人の文章や逸話を集めたもの)を刊行順に購入していることも確認できる。張海鵬『借月山房彙鈔』(1812年)の復刻(上海博古齋、1920年)に際しては予約券を使って購入している(庚申十一月二十八日、十二月二十八日)。

このように、寄贈されたもの、書店店頭で購入したものを含め、出版直後に入手したとおぼしき本がかなり多い。上海周辺の情報伝達の早さや、この種の書籍が当時において安定した市場を有していたことがうかがえる。

2 実務関連

もう一つは「政治経済を重視し、治国平天下の参考とするに足るもの」、つまり実務に関する書籍である。これらは主に1919年以降に王が塩政や減賦問題、治水事業に関与していく中で寄贈されたり買い求めたりしたものである。

水利に関して王清穆がまず参考にしているのは各地の地方志である。例えば、『蘇州府志』(同治)、『婁県志』、『金山県志』、『上海県志』、『太倉州志』(崇禎)、『宝山県志』、『青浦県志』(万歴・康熙・乾隆・光緒)を修志局から借用するなどして読んでいることが確認できる。また『明史』河渠志や、徐用福『浙西泖浦水利記』(1898年)(己未十一月十七日)、『道光中葉重浚白茆河案』(己未十一月十八日)、凌介禧『東南水利略』(1833年)(庚申八月二十三日)、金友理『太湖備考』(1750年)(庚申九月十九日)、李慶雲『統纂江蘇水利全案』(水利工程局、1889年)(庚申十二月初七日)、楊景仁『籌濟編』(詒研齋、1826年)収録の耿橘『常熟県水利全書』(辛酉正月初一日)、沈愷曾『東南水利』(辛酉正月二十一日)といった書籍についても、古書肆や知人からの借用を通じて入手し、内容を検討しており、王が太湖水利工程局の方針決定に際して過去の経緯をまず重視したことがわかる。1919年に上海の租界浚浦局が「工程計画」を発表すると⁽⁹³⁾、その内容についても検討を加える必要があると書き残している(己未二月三十日)。

3 日常生活とその他の知的関心事

以上の他には、日常生活に関わる実用的な知識に関する書籍が挙げられる。前述のように王は崇明出身の学生や留学生から農業関連の書籍を入手していたが、具体的には服部徹『田圃害虫新説』(有隣堂、1888年)、『北京農業専門学校雑誌』、菅原繁蔵『薄荷栽培及製造法』(北洋堂、1905年)といった書名が確認できる(丙辰六月初二日、丙辰七月初二日、

戊午十二月十九日)。穆湘玥⁽⁹⁴⁾ から『植棉改良浅説』を贈られたという記述も見える(丁巳七月十一日)。

本草や中医に関する書籍としては、謝元慶『良方集腋』(留耕堂、1848年)(丙辰十一月初二-初四日)、王象晋『佩文齋広群芳譜』(丁巳閏二月初四日)及び『二如亭群芳譜』(丁巳五月廿八日)、呉師機『理淪駢文』(戊午八月廿六、廿七日、九月十七日)、趙学敏『串雅』(戊午九月廿三日)などが挙がっており、王はこれらを実際に体調管理の参考にしたり、南通医校の中医科で研究することを張謇に提案したりしている(戊午九月廿二日)。その一方で、松尾榮著、劉仁航訳『七大健康法』なる書物を唐文治から贈られたり(丁巳十二月二十日)、新聞に掲載された小児痙攣の民間療法を日記に書き写したりもしている(丁巳八月初六日)。県城で第一医院を経営する沈雲扉⁽⁹⁵⁾ や、日本で医学を学び、南京の省立医院に勤める沙人傑⁽⁹⁶⁾ といった崇明出身の西洋医の診察を受けて左耳の腫瘍を切除する手術を受けたり(庚申十一月初三、初四、初八-十一日)、堂弟の冠生が胸に閉塞感があると言うのに対して、西洋医にかかることを薦めたりといった記述も見える(辛酉五月初五日)。

時事問題に関しては、王は基本的に新聞から情報を得ていた。日記中に最も頻繁に登場するのは『時事新報』で、同紙に連載された湯化龍の遺稿「湯公在波士頓中華商会之演説辞」や梁啓超のパリ講和会議参加記「欧遊心影録」を書き写したりもしている(己未二月初四-十一日、庚申二月十四日)。これ以外に上海の新聞では『申報』、『時報』、『中華新報』、『新聞報』といった名前が挙がっている。また『江蘇省公報』や『東方雑誌』の記事への言及も見える。面白いのは1920年7月に王が北京で安直戦争に巻き込まれた時で、この時王は情報を求めて中央公園の閱報所に毎日通い、『益世報』、『北京日報』、『順天時報』といった北京・天津の新聞を読んでいるが、これらについて「上海の各紙はまだ来ていない。京津の新聞で見るとべきものは極めて少なく、記事内容も正しくなく、いたずらに人々の耳目を惑わすのみである」(庚申五月二十九日)と辛口の評を下している。この他、『徳皇雄図秘著』(光華編訳社、1916年)を読んだり(丙辰十月十八日)、陸徵祥⁽⁹⁷⁾ から『参与欧洲和平大会分類報告』(1919年)を寄贈されたり(庚申二月初六日)というように、第一次世界大戦前後の国際関係に関連した書名も見える。

ところで、日記から読み取れる王清穆のパーソナリティは、実務家肌で几帳面、趣味に乏しい人物という印象が強い。例えば、世代的にはほぼ重なる山西省太原の士紳劉大鵬(1857-1942)の『退想齋日記』⁽⁹⁸⁾ に芝居見物の記事が頻出するのに対し、王清穆の6年分の日記には芝居を見たという記載が2回しかない。それも一度は蘇社成立大会で訪れた南通で張謇の「更俗劇場」に招かれたというもの(庚申三月二十三日)、もう一つはその帰

りに上海の士紳たちに招かれて「天蟾舞台」で梅蘭芳の「天女散花」を見たというものである（庚申四月初六日）。宗教的な行事や習俗に関しても、家で大晦日と元旦に祖先を祭って「喜神」の絵を貼り、春分・夏至・秋分・冬至に祖先を祭り、両親の誕生日と命日に祭祀を行い、清明に両親の墓参りをする、という以上の記述は見えない。

その王の数少ない趣味として挙げられるのが書である。日記の中でも、書法の理論書である包世臣『藝舟双楫』（1884年）を読んだり（丙辰六月十二日、九月十三日）、内兄の呉蔭培が崇明出身の文人何焯⁽⁹⁹⁾の家書を収蔵していると知り、公刊することを願ったりしており（丙辰九月十二日、丁巳十一月廿八日）、また新刊の『常熟松禪師墨跡』（丁巳九月十四日）、『朱子論語集註墨跡影本』、『錢南園墨跡影本』（戊午十二月二十日）といった墨跡も好んで購入している。

一方で詩については、王は「私は近頃好んで白香山〔白居易〕の詩を読み、気晴らしとしている。香山の詩は穏やかにしてのびやかで、真に詩人の趣旨を得ている」と称している（庚申四月二十一日）。ただ、前述の「農隱廬叢書」の方針に「詩文集は概ね含めず、制限を示した」と述べているように、あくまでも手すさび、あるいは専ら教化に役立つか否かという視点から詩というものを評価していた嫌いがある。例えば白居易について述べた上の文章は次のように続く。「『長慶集』中の詩「郡中春宴、因贈諸客」の末尾の二句に「蜂巢与蟻穴、随分有君臣」とある。今の新思想を抱く者は、君臣の一倫は民国に適さないという。これでは人が虫けらにも及ばないことになる。君臣の二字の真の意味を知らないのである。実におかしなことだ」。これは、以前に読んだ蔡元培の主張（「蔡鶴卿答林琴南書」『時事新報』1919年3月25日）に対する反論であり（己未二月二十七日）、およそ風流とはかけ離れた思考という他はない⁽¹⁰⁰⁾。実際に王の日記には、知人から依頼を受けて輓聯を書いたという記述が非常に頻繁に見えるのに対し、詩を書いたという記述はほぼ皆無である。王は所用で滞在した先で景勝地を訪れる機会が多く、各地の名所旧跡などに関する詳細な記録も残しているものの、そういった場合にも詩を書くということはしていない。

この他に王が特に興味をもっていたと思われる事柄として、暦法と国語の問題が挙げられる。暦法については、1917年の陽暦元旦の際に「民間の年越しは、ほとんど陰暦によっている。数千年来の習慣を、どうしてにわかになら改められよう。私は以前に浙江にいた時、立春を年の始めとすることを考えたが、同じく閏月を廃するにしても、西暦より適しているのではないか」（丙辰十二月初八日）という考えを示していたが、後に、西洋でも暦法の改良が議論されているという記事を『中華新報』で読み、立春を一年の開始とし、一年を365日に固定して閏月を無くすという宋代の沈括の案を元に、「立春を「孟春一日」とし、

驚蟄を「仲春一日」とし、清明を「季春一日」とする。夏、秋、冬もこれに倣い、各季節は六節気分とする。閏日がある場合は、節気に従って加える。毎年の日数は、現行の暦と同じとする。……改めた後は、孟春から季冬まで、いずれも「月」の字を使わない。某月某月というのは、陰暦であれば適当である。陽暦でも某月某月と称するのは、全く筋が通らない」という独自の暦を考案、友人の唐文治に共同で政府に提案し、さらに国際会議に提案するという話をもちかけている（己未三月初一―三日）。その後、『新聞報』でも同様の記事が掲載されたのを読み、同紙に自らの主張を投稿して検討を求めている⁽¹⁰¹⁾。実際に、前述のように、1931年以降の『農隱廬日記』はこの独自の暦法によって書かれている。

一方、国語統一は中華民国成立直後から議論されてきた問題であり、教育部は1912年に読音統一会を組織、標準読音とそれを表記する字母を作成している。1917年に中華民国国語研究会（蔡元培会長）が成立し、白話文学や国語教育の実施を訴えると、教育部は1918年に注音字母を公布、翌年に国語統一準備委員会（張一麐会長）を設立する⁽¹⁰²⁾。このような動きの中、1920年に北京を訪れた王清穆は、崇明出身の張康培と会った際、張から「近頃教育家が国語統一を主張し、注音字母を提唱し、非常に苦心している。我が国は面積が広く、方言が各々異なり、文字を統一することならできるが、言語を統一することはできない。将来交通が便利になり、自然の趨勢で言語が次第に接近するのを願うだけである。無理に手を入れようとしても、何の効果も上がらない」と国語統一に反対する意見を聞き、これに賛意を示している（庚申七月初二日）。江蘇に戻った後、南京で国語に関する講演を聞いたという手紙を崇明県視学の施祖恒から受け取った際にも、王は「今の人が国語を提唱するのは、実に解せないことである。我が国の文字は統一されて久しく、今急がれるのは教育の普及のみである。古い文字がわかりにくいので、白話文に改めなければならないという者は、文字の難易は人によって千差万別だが、これはただその分量によるのだということを知らないのである。教育を普及させるには、容易なものだけを使って教えればよい。言語は断じて統一できず、統一しなくても害はない。近頃の人の主張に従えば、恐らく言語が統一される前に、一落千丈の勢いで文字が退化してしまうだろう」と否定的な感想を書き残している（庚申十一月初一日）。教育部はこの年の末に『国音字典』を公布、王もそれを入手したものの、その序文の「語音の統一とは、人々がみな公共の国音を発することができるようにすることである。これはただ言葉が通じ、互いにわかることを求めているだけである。絶対に違いがないというのは、事の趨勢から不可能な点があるだけでなく、そもそも実用の上でも必要でない」という箇所のみを取り上げて評価するというをしている（庚申十一月二十一日）。北方官話と南方音の折衷・混合によって作られたこの『国音字典』については当時各方面から批判があったとされるが、その一例

と見ることもできるだろう。これ以後も、崇明県国語研究会主任の徐成祺⁽¹⁰³⁾に、「近頃の人は国語や白話文を提唱しているが、これは実に青年を誤らせるものである。提唱者はもともと深い基礎があるので、白話で書いても頗る理にかなっているが、もし初学者が文章を作ったならば、才能の有無、学習の態度は人によって異なるので、文言であっても白話であっても、容易な者には容易であり、困難な者には困難である。文言を学べば、必ず白話もできるようになるが、白話だけ学んでも、文言は必ずしも理解できない。文言でもその難易の水準は千差万別である。初学者はもともと容易なものから着手していた。わざわざ白話をありがたがるには及ばない。国語に至っては、統一する道理がまったくなく、いたずらに物笑いの種となるだけである」と反対の意見を伝えている（甲子三月十一日）。言語の統一は不可能かつ不要であるという認識、そして白話文の普及により文語文が廃れることに対する士紳層の強い危機感がうかがえる。

おわりに

以上、主に1916年から1921年の『農隱廬日記』から読み取れる王清穆の人的ネットワークと読書状況、知的関心事などについて紹介した。最後に、これ以降の本日記の内容についてごく簡単に紹介しておきたい。1921年9月に王の長男の王毓斌と蘇州の「呉氏外舅」が相次いで病死したことに関する記述を最後に、『農隱廬日記』は一度中断されており、以後約1年分が欠落している。執筆再開後の内容については今後検討を進める予定だが、1923年以降の同日記は、かなりの部分が太湖水利工程局督辦としての職務、特に水利の技術的な方針をめぐる局内の意見調整と、経費の調達をめぐる奔走に関する記述で埋まっている。しかし1924年頃になると、水利経費の捻出が不可能なことがほぼ確実になり、王らは太湖水利工程局の活動を事実上収束させる。さらに9月に起きた江浙戦争が江蘇一帯を大混乱に陥れ、崇明島に難民が大挙して押し寄せるに至り、王ら江蘇省の士紳たちも新たな対応を迫られることになる。これらの問題に関しては、追って別稿をもって論じたい。

註

- (1) 「茹経堂奏疏序」、「唐茹経先生政治学序」王清穆、崔龍編『農隱廬文鈔』（近代中国史料叢刊統編第40輯395、396）文海出版社、1977年（初版1939年）、巻4、唐蔚芝「王丹揆先生伝」（一）（二）『申報』1941年9月2、4日、王炳章、王毓橋、王達章「憂国憂民憂郷的

- 王清穆」中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料委員会編『上海人物史料』（上海文史資料選輯第70輯）上海市政協文史資料編輯部、1992年。
- (2) 現在、王清穆研究会編注「王清穆『農隱廬日記』」『近代中国研究彙報』第34-35号、2012年3月-2013年3月、として活字化を進めている。
- (3) 小野寺史郎「地方史研究と王清穆日記」高田幸男、大澤肇編著『新史料からみる中国現代史——口述・電子化・地方文献』東方書店、2010年。
- (4) 田中比呂志「清末民初における新県設置と地域社会」『近代中国の政治統合と地域社会——立憲・地方自治・地域エリート』研文出版、2010年。
- (5) 施同仁（1857-1926）字は礼斎。塾師。「施礼斎先生家伝」前掲『農隱廬文鈔』巻4。
- (6) 施祖恒（1872-1937）字は桂冬。廩貢生。『崇明県志』分纂。県立高等小学、尚志女学、太倉中学などで教鞭を執る。辛亥革命以後、県視学、県教育局総務課長を務める。「崇明県志稿」上海市地方史辦公室、上海市崇明県檔案局編『崇明県志』（上海府県旧志叢書）上海古籍出版社、2011年、2229頁。
- (7) 曹炳麟（1872-1938）字は吟秋。1902年、挙人。1905年、安徽で知県候補。民国以後、帰郷。1914年に崇明中学を創設、10年余にわたり校長を務める。1919年より県志編纂に従事。上海市崇明県県志編纂委員会編『崇明県志』上海人民出版社、1989年、896頁、「曹吟秋明府行状」前掲『農隱廬文鈔』巻4。
- (8) 陸燦昕（1869-1929）字は賓谷。増広生。『崇明県志』分纂。太倉中学学監、県第一小学校校長を務める。1926年、県教育局長。前掲「崇明県志稿」2230頁。
- (9) 孫昌烜。字は宇晴。孫培元の子。1902年の挙人。1906年、北京大学師範科を卒業、内閣中書。王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』（中国地方志集成上海府県志輯10）上海書店、1991年（初版1930年）、巻13。
- (10) 孫培元（?-1916）字は子鈞。1892年の進士。吏部文選司主事、郎中、遼瀋道監察御史などを歴任。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻11。
- (11) 嚴師孟。字は亜鄒。増貢生。貴州独山州州同。1909年、諮議局議員。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻13、附編巻1。
- (12) 張模。字は鷺翹。張鳳翔の子。六品蔭生。湖北襄陽荊州府通判。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻13。
- (13) 蘇人権（1871-1932）字は稚卿。附生。画家。江蘇諮議局議員。1919年、『新崇明報』を創刊。1920年、崇明県教育会会長。『崇明県志』絵図。前掲上海市崇明県県志編纂委員会編『崇明県志』895頁。
- (14) 施啓華（1851-1922）字は桐封。閩秋と号す。捐納により浙江で同知、次いで湖北で運同銜。総督張之洞が善後局に登用。署宜昌通判、後に武昌で知府に昇進。1904年、署徳安府事。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻11。
- (15) 施景華（?-1920）字は友先。捐納により広東候補知県、署鬱南県知事。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻13。
- (16) 施棟。字は象先。捐納により広東候補巡検、署番禺県丞。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻13。
- (17) 張応穀（1849-1917）字は稼生。諡は貞恪。拔貢生。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻12。
- (18) 陸夢熊（1881-1940）字は渭漁。江蘇省崇明県の人。早稲田大学を卒業。帰国後、商科

- 進士、翰林院檢討に任ぜられる。1912年から交通部参事、京漢鐵路副局長、郵電学校校長などを歴任。1922年以後、数度交通部長・次長に就任。1929年以後、膠濟鐵路管理委員会委員。1939年、華北政務委員会実業部次長。徐友春主編『民国人物大辞典』（増訂版）河北人民出版社、2007年、1355頁。
- (19) 張康培。字は醉石。1911年、日本法政科大学卒業、挙人。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻13。
- (20) 錢応清。字は鏡平。1906年、日本政科大学卒業、挙人。主事。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻13。
- (21) 徐継高（1876-?）字は燕庭。江蘇省崇明県の人。日本に留学、宏文師範を卒業。浙江財政正監理官文案、浙江勸業公所科員、浙江憲政調査局調査員、崇明県公署科員技士、審計院協審官。敷文社編『最近官紳履歴彙録』（近代中国史料叢刊第45輯450）文海出版社、1970年（初版1920年）、100頁。
- (22) 朱誦韓。字は貫微。江蘇省崇明県の人。1894年の挙人。上海広方言館学生。駐和蘭公使館二等通訳官、駐瑞典公使館一等秘書、議和大使随員。前掲『最近官紳履歴彙録』30頁。
- (23) 張新吾（1880-?）江蘇省上海県の人。東京帝国大学を卒業。帰国後、北京工業専門学校教員、農工商部主事、学部二等諮議官。民国以後、工商部参事、工商部次長代理、農商部参事など。後、私立中国学院化学系主任、駐日本公使館商務参事代理。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）1865頁。
- (24) この他、同じく堂弟の王清治（亦韓、1861-1903）とも親交があったことは確認できる。「亦韓第二十周年小紀」（1923年）前掲『農隱廬文鈔』巻4。
- (25) 王棟、王燮『王氏支譜』1864年、「先世以仕宦蒞崇在乾隆中葉之考証」（1937年）前掲『農隱廬文鈔』巻4。
- (26) 「亦韓第二十周年小紀」（1923年）、「重懸寧遠堂扁額記」（1937年）前掲『農隱廬文鈔』巻4。
- (27) 呉蔭培（1851-1931）字は樹百。穎芝と号す。江蘇省呉県の人。1890年、第一甲三名（探花）で進士及第。翰林院編修、京兆試・礼部試・福建郷試考官を歴任。1905年、日本を視察。帰国後、廉州府・潮州府・貴州鎮遠府知府などを歴任。辛亥革命後、帰郷。1916年、修志局を設立、『呉県志』総纂に推挙される。呉県地方志編纂委員会編『呉県志』上海古籍出版社、1994年、1136-1137頁。
- (28) 唐文治（1865-1954）字は穎侯。蔚芝と号す。晩年は茹経と号す。江蘇省太倉県の人。1892年の進士。戸部主事。1898年、総理衙門章京。1901年、那桐の随員として日本に派遣。外務部への改組に伴い外務部権標司主事。1902年、載振の随員としてイギリスに派遣。1903年、商部右丞、次いで左丞。1906年、工商部への改組に伴い左侍郎、署尚書。まもなく辞職。1907年、上海高等実業学堂監督。1908年、江蘇教育総会会長に当選。1920年より国学専修館主講。前掲『民国人物大辞典』（増訂本）1316頁。「茹経堂奏疏序」前掲『農隱廬文鈔』巻4、「王君丹揆六十寿序」（1919年）唐文治『茹経堂文集』二編（近代中国史料叢刊続編第4輯32）文海出版社、1974年（初版1927年）、巻7。
- (29) 張謇（1853-1926）字は季直。奮翁、奮庵と号す。江蘇省南通県の人。呉長慶の幕僚を経て、1894年、状元で科举及第。1902年、南通州師範学校、女子師範学校を設立。呂四塩業公司、油廠、麵粉廠、漁業公司などを経営。日本を視察。商部頭等顧問官、予備立憲公会副会長、江蘇教育総会会長、江蘇諮議局議長などを務める。辛亥革命後、統一党、次い

- で共和党理事。1913年、督辦導淮事宜、全国水利総裁、農商総長。晩年は南通で地方事業に参与。華成塩壘公司、大生紗廠、広生榨油公司、復興麵粉公司、資生鉄冶公司、大達輪船公司、淮海実業銀行などを経営。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）1754頁。
- (30) 周廷弼（1852-1923）字は舜卿。耐庵、耐叟と号す。江蘇省無錫県の人。商部顧問、後、無錫で裕昌絲廠を経営。予備立憲公会董事。陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）浙江古籍出版社、2005年、809頁。「周君舜卿墓表」前掲『農隱廬文鈔』巻4。
- (31) 呉兆曾（1873-1935）字は縉雲。寄塵と号す。江蘇省鎮江府の人。秀才。1912年から20年余りにわたって大生紗廠駐滬事務所を主持した。鎮江市志編纂委員会編『鎮江市志』上海社会科学院出版社、1993年、1642頁。
- (32) 王震（1867-1938）字は一亭。江蘇省上海県の人。原籍は浙江省呉興県。上海の銭莊などで働きながら学ぶ。1906年、予備立憲公会会董。日清汽船株式会社・大阪郵船株式会社・三井洋行上海製造絹糸社社長などを務める。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）58-59頁。
- (33) 郁芑生（1873-1926）名は世豊、寿豊、鴻興。江蘇省海門庁の人。錫類教会小学に学ぶ。大生二廠に勤務。イギリスで紡績機の買い付けに従事。帰国後、大生機器公司經理。南通市地方志編纂委員会編『南通市志』上海社会科学院出版社、2000年、2491頁。
- (34) 徐世昌（1855-1939）字は卜五。菊人、東海、韜齋と号す。直隸省天津県の人。1886年の進士。袁世凱の下、新建陸軍營務処総辦を務める。1903年、商部右丞。以後、署兵部左侍郎、会辦練兵大臣、巡警部尚書、民政部尚書、東三省総督、郵伝部尚書、督辦津浦鉄路大臣、憲政編查館大臣、内閣協理大臣などを歴任。1914年、国務卿。1918年、大総統。1922年、辞職。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）1206-1207頁。
- (35) 単鎮（1876-1965）東笙と号す。1903年の進士。農工商部工務司郎中。民国以後、工商部首席秘書、江蘇審計分處處長、審計院第三庁庁長、無錫の国学専科学校教授、呉県公款公産管理処主任、呉県救済院院長、私立豊備義倉董事長、呉県參議會參議員を歴任。夏冰、関智英訳「蘇州新史料の発掘と活用」前掲高田幸男、大澤肇編『新史料からみる中国現代史』329頁。
- (36) 楊寿栢（1868-1948）原名は寿棫。字は味雲。江蘇省無錫県の人。1891年の挙人。孫家鼐などの幕僚を経て、商部保惠司主事、平均司主事。1905年、5大臣の憲政視察団に随行。帰国後、農工商部工務司主事兼商律館纂修、工務司員外郎兼公司注冊局総辦、商標局会辦、度支部丞參兼財政清理処総辦。民国以後、山東省財政庁庁長、財政部次長、參議院議員、全国棉業督辦、無錫商埠局督辦、塩務署署長などを歴任。天津華新沙廠を経営。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）2163頁。
- (37) 邵福瀛（1882-?）字は厚夫。江蘇省常熟県の人。挙人。内閣中書、商部主事・員外郎・參議・右參議。民国以後、滨江関監督、九江関監督など。前掲『最近官紳履歴彙録』82頁。
- (38) 毛祖模。字は艾孫。1893年の挙人。湖北道員、商部郎中、奉天農工商局会辦、民生司蒙荒局総辦、營口税捐局総辦、江寧電報局総辦、南昌電報局総辦、政事堂機要局僉事、吉林滨江関監督など。前掲『最近官紳履歴彙録』5-6頁。
- (39) 熙彦（1851-?）満洲正白旗人。字は雋甫。1892年の進士。民政部員外郎、内閣学士、商部左參議、農工商部左丞、右丞、実録館副総裁、貴胄法政学堂監督を歴任。辛亥革命に際し、袁世凱内閣の農工商部副大臣を務める。後、蒙藏院副総裁、參議院議員。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）1288頁。
- (40) 紹英（1861?-1925）満洲鑲黄旗人。字は越千。京師大学堂提調。日本の教育を視察。

- 1903年、新設の商部左参議、右丞。1905年、憲政視察出発に際し、爆弾で負傷。商部左丞、右丞、度支部左侍郎。辛亥革命に際し、袁世凱内閣の度支部大臣を務める。民国以後、総管内務府大臣、清室善後委員会委員。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）853頁。
- (41) 傅柏銳（1875-?）字は峻山。広東省南海県の人。京師同文館を卒業。ロンドン大学工科を卒業。京師大学堂英文教習、京師高等実業学堂英文兼機械教習、教務長、考察各国政治大臣三等参贊官、京師自來水公司随辦、外務部英文頭等繙訳官、崇陵監修代理監督、塩政処諮議官、学部二等諮議官など。民国以後、財政部印刷局総稽查会辦、蒙藏院編纂。前掲『最近官紳履歴彙録』185頁。
- (42) 載振（1876-1947）姓は愛新覺羅。字は育周。満洲右翼鑲藍旗人。慶親王奕劻の長子。1902年、イギリス国王エドワード7世の戴冠式に出席。帰国後、鑲藍旗漢軍都統、管理火器營、正紅旗総族長などを歴任。1903年、新設の商部尚書。1906年、官制編纂大臣、農工商部尚書。諮政院議員。1911年、イギリス国王ジョージ5世の戴冠式に出席。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）2190頁。
- (43) 陳世璋（1886-?）字は聘丞。江蘇省嘉定県の人。バーミンガム大学を卒業。北京大学工科・理科教授、六河溝旗鋸公司顧問工程師。後、江蘇省政府建設庁庁長。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）1399頁。
- (44) 周伝経（1874-?）字は賛克。江蘇省嘉定県の人。京師同文館を卒業。外務部主事、駐奧地利公使館二等参贊など。民国以後、外交部僉事、外交部通商司司長、外交部参事。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）932頁。
- (45) 廉泉（1868-1932）江蘇省無錫県の人。字は南湖。南湖居士、恵卿、恵清、恵和と号す。1894年の挙人。礼部郎中。無錫俟実学堂、競志女中の設立に参与。上海文明書局を経営。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）1274頁。
- (46) 夏孫桐（1857-1941）字は潤枝、悔生。江蘇省江陰県の人。1892年の進士。会典館編書処総纂、広東主考官、湖州府知府などを歴任。民国以後、清史館総纂。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）1139-1140頁。
- (47) 汪鳳瀛（?-1925）江蘇省呉県の人。字は荃台。拔貢生。損納により中書舎人。1892年、兄の汪鳳藻に随い渡日。後、張之洞の幕僚を経て、湖南省常德府知府、長沙府知府。汪榮宝・汪東の父。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）541頁。
- (48) 姚錫光（1856-?）江蘇省丹徒県の人。字は石泉、石荃。天津武備学堂教習兼監督。民国以後、宣撫使、錫威將軍、蒙藏事務局総裁、参政院参政などを歴任。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）957頁。
- (49) 王景沂（?-1921）江蘇省江都県の人。字は義門。1889年の挙人。内閣中書。保国会・戒纏足会に参加。広東省長楽県知県、嘉応直隸州知州。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）79頁。
- (50) 鄭立三。字は笠山。江蘇省江陰県の人。「江浙水利聯合会紀録』『江蘇水利協會雜誌』第5、6期、1919年6月。
- (51) 金天翻（1874-1947）字は松岑。鶴望と号す。江蘇省呉江県の人。1903年、蔡元培の中国教育会及び愛国学社に参加。鄒容『革命軍』の出版を援助。また『三十三年落花夢』などを翻訳出版。1912年、江蘇省議会議員。1923年、呉江県教育局局長。1927年、江南水利局局長。1932年、中国国学会を組織。1938年、上海光華大学中文系教授。呉江市地方志編

- 纂委員会編『吳江県志』江蘇科学技術出版社、1994年、840頁。
- (52) 龐樹典。字は芝符。江蘇省常熟県の人。1914年、水利処調査員、局務主任。1915年、調査測繪淞渚正主任。1917年、水利局測量科科長兼丙部測量事務所正主任。沈佺編『民国江南水利志』（中国水利要籍叢編第5輯43）文海出版社、1971年（初版1922年）巻末。
- (53) 袁承曾。字は則先。江蘇省南通県の人。1914年、水利処測量員、劉河測務主任。1915年、調査測繪淞渚副主任。1917年、水利局測量科科員兼丙部測量事務所副主任。前掲沈佺編『民国江南水利志』巻末。
- (54) 宗嘉祿。字は受于。江蘇省常熟県の人。前掲「江浙水利聯合会紀錄」。
- (55) 宋承家(?-1920) 字は蓀葦。1900年、副榜貢。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻13。
- (56) 潘澄鑑。字は芸生。江蘇省呉興県の人。前掲「江浙水利聯合会紀錄」。
- (57) 黄以霖(1857-1932) 字は伯雨。江蘇省宿遷県の人。1891年の挙人。湖北鄖陽知府、候補道、署湖南提学使兼署布政使などを歴任。張謇らと宿遷に耀徐玻璃廠・永豊麵粉廠を設立。辛亥革命後、上海で華洋義賑会を設立。前掲『民国人物大辞典』（増訂本）1580頁。
- (58) 沈維賢(1865-1940) 字は思齊、師徐。江蘇省松江県の人。1891年の挙人。江蘇諮議局議員。民国以後は江蘇省議会議長、参議院議員などを務める。前掲『民国人物大辞典』（増訂本）746頁。
- (59) 費樹蔚(1883-1935) 字は仲深。韋齋と号す。江蘇省呉江県の人。袁世凱の幕僚を経て、郵伝部員外郎、京漢鐵路理事など。後、蘇州電気公司董事長、江豊銀行董事長、信孚銀行董事長、蘇州総商会特別会董など。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）2099頁。
- (60) 沈佺。字は期仲。浙江省呉興県の人。1914年、江南水利局総辦。1915年、督修宝山海塘工程。1918年、全国河務研究会会員。前掲沈佺編『民国江南水利志』巻末。
- (61) 錢崇固。字は強齋。江蘇省呉江県の人。江蘇省議会議長。後、律師。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）1011-1012頁。
- (62) 金蓉鏡(1855-1929) 字は香巖。甸丞と号す。浙江省秀水県の人。1889年の進士。工部鉛子庫都水司主事、湖南省郴州・靖州直隸州知州、永順府知府、公部窯廠監督、軍機処章京などを歴任。靖州知州在任中、中国同盟会湖南分会会長禹之謨を処刑している。辛亥革命後、帰郷。1919年、太湖浚渫事業を發起。1920年、政府に嘉興・嘉善・平湖・崇徳・呉興・徳清6県の減賦を請願。嘉興市志編纂委員会編『嘉興市志』中国書籍出版社、1997年、2248-2249頁。
- (63) 錢能訓(1869?-1924) 字は幹丞、幹臣。浙江省嘉善県の人。1898年の進士。翰林院編修、広西学政、刑部員外郎、監察御史丞、巡警部左丞、奉天右参贊、順天府尹、陝西布政使・護理巡撫を歴任。辛亥革命後西安で革命党を鎮圧、清朝滅亡時に拳銃自殺未遂。以後、北京政府内務次長、約法會議議員、政事堂右丞、礼制館副総裁、平政院院長、内務総長、国務総理を歴任。五四運動後、迫られて辞職。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）1011頁。1919年11月、督辦太湖水利工程時宜。翌年8月辞職。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）2626頁。
- (64) 汪大燮(1859-1929) 原名堯兪、字は伯唐、伯棠。浙江省錢塘県または杭県の人。1889年の挙人。内閣中書、翰林院侍読、戸部郎中、総理各国事務衙門章京を歴任。1902年、留日学生総監督。1905年駐英公使。翌年外務部右侍郎。1907年考察憲政大臣に任ぜられ、英独などを視察。『英国憲政叢書』を著す。1910年駐日公使。1913年帰国、教育総長、平政

- 院院長、参政院参政兼副院長、交通総長、外交総長、国務総理代理などを歴任。パリ講和会議外交後援会委員長。1922年国務総理兼財政総長。1925年外交委員会委員長。晩年は慈善事業に従事。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）540頁。
- (65) 陶葆廉（1862-1938）字は拙存。浙江省秀水県の人。陶模の子。優貢生。光緒末年、記名提学使。1902年、浙江大学堂総理代理。1908年、陸軍部軍機司郎中。1914年、浙江通志局分纂。1919年、太湖水利工程局会辦。前掲『嘉興市志』2092-2093頁。
- (66) 儲南強（1876-1959）別名青綰。字は鑄農。簡翁、二洞老人と号す。江蘇省宜興県の人。江陽南菁書院を卒業。黄炎培・沙彦楷と同学。後、故郷で勤学処及び小学校を設立する。辛亥革命後に民政長に推薦され、後に南通に移り、堤防建設などに従事。後、南洋公学で国文教師を勤める。帰郷後、治水と宜興の市政、古跡の修復に携わる。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）1227頁。
- (67) 曾樸（1872-1935）字は孟樸、小木、籀齋。筆名は東亜病夫。江蘇省常熟県の人。1891年の挙人。両江総督端方の幕僚を経て、民国以後は省議会議員、江蘇省官産処長、財政庁長、政務庁長など。江蘇省常熟市地方志編纂委員会編『江蘇省常熟市志』上海人民出版社、1990年、1093-1094頁。
- (68) 陳其采（1880-1954）字は藹士。号は涵廬。別名に陳安。浙江省呉興県の人。日本の士官学校卒業。長沙武備学堂総教習および監督兼新軍統帯、中枢軍諮府第三庁庁長兼保定軍校監督などを歴任。南京臨時政府諮議、後に帰郷して経武学堂で教鞭をとる。中国銀行浙江分行副行長となり、旅滬同郷会「湖社」を組織。1927年以後、浙江省政府委員兼財政庁庁長、国民政府主計処主計長に任ぜられ、中央銀行・中国銀行、国民政府委員などを兼職。兄に陳其業・陳其美がいる。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）689頁。
- (69) 沈国鈞。字は治丞。江蘇省呉江県の人。1918年、参議院議員。劉寿林、万仁元、王玉文、孔慶泰編『民国職官年表』中華書局、1995年、1274頁。
- (70) 沈金鑑（1875-1924）字は叔詹、叙詹。浙江省呉興県の人。武挙人。民国以後、京師地方行政講習所所長、順天府尹、京兆尹、湖南巡按使、浙江省省長などを歴任。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）744頁。
- (71) 張一塵（1867-1943）字は仲仁。江蘇省呉県の人。1903年、経済特科。袁世凱の幕僚を経て、民国以後、蘇軍都督府民政司長、総統府秘書長、教育部総長などを歴任。後、帰郷して和平期成会、国会会議、蘇社、呉県善人橋農村改進社、呉中保墓会などの活動に参加。『呉県志』総纂。日中戦争中は重慶で国民参政会参政員を務める。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）1758頁。
- (72) 汪曾武（1871-1956）江蘇省鎮洋県の人。字は威子、仲虎。1894年の挙人。公車上書に参加。民政部員外郎。民国以後、平政院第一庭書記官。人民共和国以後、中央文史館館員。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編増訂本）548頁。
- (73) 趙椿年（1866-1942）字は劍秋。江蘇省武進県の人。1888年の挙人。民国以後、工商部参事、財政部次長、税務処会辦、総統府財政顧問、審計院副院長など。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）2292頁。
- (74) 莊蘆寛（1866-1932）江蘇省武進県の人。字は緘三、思緘。南菁書院を卒業、副貢生。広西省平南知県、梧州知府、思順広道兼広西辺防督辦を歴任。後、帰郷して上海商船学校教務長。辛亥革命に際し、代理江蘇都督。後、都肅政使、約法会議議員、審計院院長、故宫博物院理事兼図書館館長。『江蘇通志』総纂。前掲『中国近現代人物名号大辞典』（全編

増訂本) 248頁。

- (75) 呉宗濂 (1855?-?) 淙濂とも。字は挹青、挹清。景周と号す。江蘇省嘉定県の人。監生。上海広方言館でフランス語を学び、後に京師同文館を卒業。駐英・駐俄使館翻訳、芦漢鐵路稽查部長、上海広方言館法語教席、駐西班牙・奥国代辦、外務部右丞、出使義国大臣を歴任。民国以後、引き続き駐意公使。1914年帰国、大総統府外交諮議、外交部特派吉林交渉員、安福国会参議員を歴任。1925年、上海報告市政會議委員。1930年から国民政府修約委員会委員。1936年公董局華人董事。前掲『中国近現代人物名号大辞典』(全編増訂本) 487頁。
- (76) 趙鳳昌 (1856-1938) 字は竹君。江蘇省常州府の人。曾国荃・張之洞の幕僚を経て、張謇らと予備立憲公会を組織。辛亥革命に際し、南北和議に参与。1912年、張謇・唐文治らと統一党を組織。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 2295頁。
- (77) 仇繼恒 (1855-1935) 字は涑之。江蘇省江寧県の人。進士。江蘇省諮議局副議長。民国以後、農会会長、南京馬路工程局局長。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 199頁。
- (78) 沈恩孚 (1864-1944) 字は信卿。江蘇省呉県の人。1894年の挙人。1904年、日本の教育を視察。江蘇学務総会を創設。民国以後、江蘇都督府副民政長、江蘇教育総会坐辦、全国各省教育会連合会江蘇代表。中華職業教育社を発起。上海市議會議長。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 747頁。
- (79) 馬士傑 (1863-1946) 雋卿と号す。江蘇省高郵県の人。祖籍は安徽省和県。挙人。日本を視察。民国以後、江蘇都督府内務司司長、籌浚江北運河工程局総辦など。江蘇河海工程測繪養成所、中華職業学校、甲子社、人文図書館を設立。泰源塩壘公司を経営。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 1152頁。
- (80) 方還 (1866-1932) 名は張方遠、張方中。字は惟一。江蘇省崑山県の人。秀才。崑山商會会長、江蘇省諮議局議員、資政院議員など。辛亥革命に際し、崑山民政分府民政長。民国以後、北京師範学校校長、南通女子師範学校校長、江蘇省省長公署機要処秘書など。国民政府以後、交通部秘書など。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 221頁。
- (81) 黄炎培 (1877-1965) 楚南、韜之、任之と号す。江蘇省川沙県の人。南洋公学に学ぶ。蔡元培らと中国教育会を発起。1903年、渡日。帰国後、川沙県視学、勸学所総董、江蘇教育総会常任調査員など。1905年、中国同盟会加入。1909年、江蘇諮議局議員。辛亥革命後、江蘇省教育司司長、江蘇省教育会会長。1915年、アメリカを視察。1917年、蔡元培らと中華職業教育社を組織。日中戦争中、国民参政会参政員、中国民主政団同盟中央常務委員、民主建国会常務委員会主任委員など。人民共和国成立後、政務院副総理、輕工業部部長、人民代表大會常務委員会副委員長、政治協商會議全国委員会副主席など。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 1595-1596頁。
- (82) 韓国鈞 (1857-1942) 字は紫石、止石、子石。江蘇省泰県の人。1879年の挙人。署鎮平県知県、署符祥県知県、署武陟県知県、署永城県知県、署浚県知県、河北鈳務局総辦、河北交渉局会辦、河北蚕業実業中学堂総辦など。1905年、日本の農工商鈳業を視察。帰国後、陸軍参謀処総辦、鈳政調査局総辦、奉天交渉局局長、奉天開埠局局長、奉天農工商局副局長、両広督練公所参議、兵備処総幹、奉天勸業道、署奉天交渉司、葫蘆島商埠督辦、吉林省民政司司長など。民国以後、江蘇省民政長、安徽省民政長、安徽巡按使、運河工程局会辦、江蘇省省長などを歴任。泰源塩壘公司を経営。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 2657-2658頁。

- (83) 張孝若 (1898-1935) 名は怡祖。字は孝若。江蘇省南通県の人。張謇の独子。アメリカに留学、アーノルド商科大学を卒業。帰国後、淮海実業銀行經理、江蘇省議會議員、揚子江水道討論委員会会長、農商部次長など。張謇の死後、南通学院院长、大生紗廠董事長、大達輪船公司經理、淮南各塩壘公司常務董事長、大陸報館董事など。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 1797頁。
- (84) 孫徹 (1866-1952) 字は滄叟。江蘇省南通県の人。挙人。江蘇省議会議副議長。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 1521頁。
- (85) 穆恕再 (1874-1935) 名は湘瑤。江蘇省上海県の人。穆湘玥(藕初)の兄。武挙人。辛亥革命に際し、淞滬警察庁庁長。恒大紗廠・信大窑廠などを経営。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 2612頁。
- (86) 榮徳生 (1875-1952) 名は宗銓。字は徳生。江蘇省無錫県の人。兄の榮宗錦(宗敬)らと福新・茂新麵粉廠、振興・申新紡織廠などを経営。江蘇省議會議員、衆議院議員などを務める。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 2331頁。
- (87) 劉垣 (1871-1962) 江蘇省武進県の人。字は厚生。大生第二紡織公司經理。工商部次長。北票煤鉍公司董事長。前掲『中国近現代人物名号大辞典』(全編増訂本) 274頁。
- (88) 張簪 (1851-1939) 字は叔儼。晩年、退庵と号す。江蘇省南通県の人。1879年、捐納により県丞。1896年、湖広総督張之洞による湖北宜昌塩加厘局坐辦。1904年帰郷、以後、弟の張謇とともに大生紗廠などを経営。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 1749頁。
- (89) 徐鼎康 (1876-1938) 字は錫丞。江蘇省嘉定県の人。吉林民政使、吉林省内務司司長、安徽省安慶道尹、江蘇省金陵道尹、江蘇省長などを歴任。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 1230頁。
- (90) 董康 (1867-1947) 字は授経、綬経、綬金。江蘇省武進県の人。1890年の進士。刑部主事、員外郎、郎中。1902年、法律館纂修、京師法律学堂教務長。民国以後、大理院院長、司法総長などを歴任。後、上海大学校長、上海法科大学校長、北京大学教授など。日中戦争中、中華民国臨時政府議政委員会常務委員、華北政務委員会委員、国民政府委員など。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 1960頁。
- (91) 「農隱廬記」(1937年) 前掲『農隱廬文鈔』卷4。
- (92) 汪詒年 (1866-?) 字は頌穀。浙江省錢塘県の人。汪康年の弟。1901年の経済特科。兄を助け、『時務報』、『中外日報』、『時事新報』の主筆・經理を担当。後、商務印書館編輯。編に『汪穰卿先生遺著』、『汪穰卿先生伝記』がある。上海図書館編『汪康年師友書札』(四) 上海古籍出版社、1989年、4055頁。
- (93) 「浚浦局工程計画」『申報』1919年3月31日。
- (94) 穆湘玥 (1876-1943) 字は藕初。江蘇省上海県の人。ウィスコンシン大学農科・イリノイ大学農科・テキサス農工専科学校に学ぶ。帰国後、徳大紗廠・厚生紗廠・豫豊紗廠を設立。中華勤工銀行、上海華商紗布公益所を設立。国民政府以後、工商部次長、実業部次長などを歴任。日中戦争中、行政院農産促進委员会主任委員、農本局總經理など。前掲『民国人物大辞典』(増訂版) 2612-2613頁。
- (95) 沈雲扉 (1890-1969) 字は堯階。1909年、南京の江蘇陸軍小学入学。1907年より上海同済大学医科で学ぶ。1914年、卒業、宝隆医院勤務。1915年、帰郷して医院を開業。1916年8月、崇明県地方公款公産經理処から補助金を得て第一医院を設立。1919年、上海同徳医学院教務長。1921年から1927年まで南洋大学校医を兼任。日中戦争中、上海紅十字会第

- 十九傷兵医院に勤務。戦後、交通大学校医。1956年、西安交通大学衛生科長。前掲上海市崇明県志編纂委員会編『崇明県志』909頁。
- (96) 沙人傑。字は鳳千。1911年、日本医科大学を卒業、進士。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻13。
- (97) 陸徵祥（1871-1949）字は子欣、子興。江蘇省上海県の人。上海広方言館、北京同文館にフランス語を学ぶ。駐俄徳奥荷四国公使館学習員・四等通訳官・参贊、駐荷蘭欽差大臣、駐俄国欽差大臣などを歴任。中華民国以後、外交部総長、國務院総理、総統府高等外交顧問、パリ講和会議中国首席代表、駐瑞士公使、国際連盟代表など。前掲『民国人物大辞典』（増訂版）1357-1358頁。
- (98) 劉大鵬遺著、喬志強標注『退想齋日記』山西人民出版社、1990年。
- (99) 何焯。字は潤千、後に岷瞻。義門先生と称される。江蘇省崇明県の人。蘇州に居住。1703年の進士。翰林院庶吉士、侍読八貝勒府、武英殿纂修。考証学と書をよくした。前掲王清穆主修、曹炳麟総纂『崇明県志』巻12。
- (100) ただしこれは白居易に限ったことではなく、王は張君勛の英国海軍の規律に関する称賛や（君勛「福斯海湾（Firth of Forth）観英海軍記（続）」『時事新報』1920年3月29日）、果てはデューイの江蘇省教育会における講演（孫祖基記録「徳謨克拉西的意義」『時事新報』1920年6月5日）まで、「君臣」倫理が民国にも必要だという根拠になるという点から評価している（庚申二月初十日、四月十九日）。
- (101) 「中国自定曆法議」（1922年）前掲『農隱廬文鈔』巻1。
- (102) 村田雄二郎「五四時期の国語統一論争——「白話」から「国語」へ」小谷一郎、佐治俊彦、丸山昇編『転形期における中国の知識人』汲古書院、1999年。
- (103) 徐成祺（1862-1939）字は引恬。伯庚・不更と号す。県庠生。1906年、尚志女塾を創設。1908年、日本の女学を視察。1919年10月、国語研究会を發起、拼音字母の普及を訴える。翌年、同会主任。前掲上海市崇明県志編纂委員会編『崇明県志』896-897頁。